《卒業論文要旨》

『源氏物語』人物論 ―紫の上の造型―

学籍番号＊＊＊＊＊＊＊　四年　△△△△ゼミナール　■山 ◎子

［Ⅰ］目次

序……一
第一章　第一部における紫の上……七
第一節　若紫―賢木……八
第二節　須磨―薄雲……二一
第三節　藤裏葉……三八
第二章　第二部における紫の上……五一
第一節　女三宮と源氏と紫の上……五二
第二節　朧月夜と源氏と紫の上……六七
第三節　明石の君と源氏と紫の上……七五
第四節　源氏と紫の上……八八
結　語……一〇三

［Ⅱ］題目設定の理由と研究史の概要

源氏物語人物論は、これまでも池田勉、秋山虔、阿部秋生、今井源衛、藤村潔氏等の手で進められてきたが、人物像やモデル論、もしくは人物中心の構想論のレベルで問題が捉えられていた。本稿では物語という虚構世界と一人物がどのようにかかわりつつ、状況の中で意味を付与されているかについて考察してみようと考えた。

［Ⅲ］資料と方法

青表紙本系の大島本の翻刻である日本古典文学全集を用い、主に秋山虔氏の研究を批判的に取り上げながら、紫の上の記述を拾いだし、「宿世」「はかなし」「あはれ」などをキーワードとして分析することによって紫の上造型の意味を考える。

［Ⅳ］考察の経過

第一部において、紫の上は大きく分けて三回の変貌を遂げる。「若紫」～「賢木」では、藤壺に似た少女として、源氏の思慕の鎮静と増幅という二面的役割を担って存在していた。このことは、藤壺と源氏の物語の破綻を防ぎ、発展を促す役割を果した。（第一章第一節）

「須磨」～「薄曇」では、藤壺の出家後、源氏にとって「妻」という、藤壺にかわる地上的な存在となる。明石の君腹に姫君が誕生した後は、姫君をひきとって養育する役割を担った。これは、紫の上の意識を超えて、将来の源氏の栄華を保証する后の養育という役割を果していたのである。（第一章第二節）

「朝顔」～「藤裏葉」では、朝顔の宮の一件を深刻に嫉妬することにより、源氏からみて、藤壺とは別の個性としてとらえ直された。紫の上はここに六条院の実質的な中枢の女君として措定されたともいえよう。このことは、紫の上の意識を超えて、六条院の栄華の一翼を担うこととなっていったのである。（第一章第三節）

第二部では、女三宮降嫁により、孤児同然の継子で正式の手続きを経ず結婚した自身の境涯をみつめ、自己を取り巻く一切の「世」への不信を抱いた。これは他者と心を通わせることへの不信・不可能の念を持ったということであり、現世に生きることの絶望の把握であった。このように現世への離反と執着の間で彷徨していたのが、第二部での紫の上像であった。（第二章）

［Ⅴ］結　論

源氏物語の世界は、個々の人物造型や、その組み合わせとしての人間関係の出来事を超え、作者の世界意識の表現であることが明らかになった。源氏物語を読むということは、作品世界を鏡として作者の存在の謎を垣間見ることになるのである。

★右の要領で、自分の言葉でなるべく簡潔にＡ４判一枚（Ⅱ以下で千字以内厳守、ワープロの場合の書式五十字×五十行）にまとめ、二〇二五年一月六日（月）午後四時までに各指導教員のメールアドレスにＰＤＦにて送信の上、提出すること。